

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第136号・平成13年1月1日

年表で読む

古平の歴史

《43》

―― 鮭 漁 ――

■鮭漁の出願が増える

明治十四年、例年通り鮭建網の出願をしたところ、開拓使から次のように許可されました。

書面ニアルヨウニ入船町前浜ニ於テ鮭建網ノ漁業ノ件ハ間キ届ケルノデ、規則ニアルヨウニ現品デ税ヲ納メルコト

明治十四年十一月十七日

開拓大書記官

調所広丈 回

前年まで続けていた、港町事代社（現在の厳島神社）前浜の鮭漁は許可にならず、再三、嘆願書を出しましたがだめでした。この場所はチョペタン川の川口に近いので、資源保護のために許可にならなかったようで

す。

この年から願書には隣の網との距離や、網を沖へ出す距離を書き入れた図面をつけることが定められ、隣との網の間隔は九百間（約一六二〇メートル）、沖出しの距離は四百二十間（約七五六メートル）とされていきました。

■塩鮭の輸出には承認

また、当時は塩鮭にして輸出（本州方面への移出）するときには、事前に願書を出して承認を得ることが必要でした。

受 書

コノ度鮭塩引ノ輸出ニツイテオ願ヒイタシマシタトコロ差シ支エナク精製品ヲモツテ上納スルヨウ申シツケラレマシタガ承知イタシマシタ。保証人ト連名

デ受書ヲ差シ出シマス。

明治十五年十月二十六日

入船町二十三番地

仲谷才吉 ㊦

沢江村三番地

仲谷勇次郎 ㊦

古平郡出張所

租税課徴収係 御中

前書ノ通り相違アリマセン

古平郡港町外三カ町

戸長 西島金八 ㊦

明治十六年、古平郡内の鮭建網は四か統、刺網は七十放が許可になっていましたが、明治十八年には建網は三か統に減り、刺網は百五十放に増加して許可されています。

■漁夫給料と漁獲高

鮭漁は、鯨漁ほどではありませんが多くの漁夫を必要とします。アイヌの人たちが多く雇われ、また、石狩川周辺まで出稼ぎに行つたという記録もあります。ここに、当時の給料の請取証が残っています。

請 取 証

金式拾円也 但し通用紙幣

右金士人四名の給料

内正に受取申可候

明治十八年七月廿七日

高橋安太郎 ㊦

太田庄衛門 ㊦

相内米造殿

鮭の漁獲は次第に増えてきたが、後志管内の郡内での漁獲高は次のようでした。

五千～一万円未満

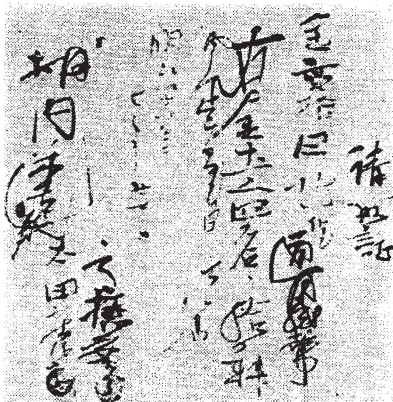
古平・寿都・高島

一万～三万円未満

忍路・余市

鮭漁は、その後次第に海岸近くでは漁獲が減る傾向にあり、明治二十一年、郡内の建網業者は沖出しを願ひ出て許可されています。しかし、これには漁業組合頭取の連署が必要でした。

△給料の請取証▽



—大正七年—

6/5 花火の音で目を覚

ます、今日は運動会だ、家でも朝早くから昼食作りで忙しい、会場は昼近くになると満員だ、合、田といっしょにビヤホールの二階に陣取る、子どもたちは大喜びだ、夜は古平座の歌舞伎を見に行く。

6/7 山中方面コナゴ漁があり、一杯ぐらいずつったという。

6/9 軍人分会運動会があるというので寄付に来る、十円寄付をする、妻は愛国婦人会に勧誘されて入会する。

6/11 新地で興業する本田曲馬団一行が、楽隊つきで町廻りをする、珍しいのでみんなで見ている。

6/12 軍人分会と青年団の合同運動会の当日だ、花火の合図で始まる、賞品係になったが支店で不幸があったので欠席する。

6/23 今年のタラ釣りと鯀粹引きをした、入舟町と港町の川崎船連中は大豊年だったろ

う、水揚げ三千円ぐらいあり、一人当たり、二カ月で二百七十

円から三百二十円は当たるとのこと、雇い衆の五、六人分はとった、タラは大漁で値段も暴騰したので、網や米の値上がりにも何にも言わぬ、実に景氣の良いことだ。

6/29 目下、鯀製品は下落している、身欠 一五貫 一四円ぐらい

高野名幸作さんの日記から



[37]

鯀 一本 二、〇五〇円
数の子 同 八、〇〇〇円

薪は大暴騰だ、イタヤ一敷十五円、雑木で十二円、これでは前代未聞だ。

7/1 蚊が出てきてはじ

めてカヤをつる、巡查も夏の白服になった、町内では家の普請や道路の工事も盛んだ、マニラロープが米国で輸出禁止で原料の確保が困難とのこと、今後、値段がどう変動するのか。

7/2 昨日、今日と鯀場の

のようなダシ風が吹く、リンゴの袋掛けを始めたが、今年の実の着きは悪い、こんな年は手入れをしっかりととして、来年はその埋め合わせをしたい、毛虫がひどい。

7/4 このごろ行李（こり）の売れ行きがよい、イカつけに奥尻方面へ出稼ぎに行くためだ、入舟町方面では十隻以

上も行くとか、本陣の浜では二千トンもあるような汽船が、稲倉石鉾山からの鉾石を積み込んでいる、丸山ふもとのリンゴを見て来たが、葉の色もよく実の着きもよい、どうしてこんなにいいの不思議である。

7/5 古平水力発電と火力発電の出願の件、海産物の下落、甲寅会のことについて、主人といろいろ話す。

7/8 七梅野方で共益会

の総会があり、十人ほどが集まる。

7/9 宵宮祭だと言うのに雨だ、永い雨で土場付近では水をついたところもある、郷社へ参詣する、店がたくさん出ていて、見せ物小屋、剣舞などもあった。

7/10 雨が本降りとなつて、これでは神輿の渡御も無いだろう、一般に景氣がいいせいか料理屋などがはやっていて、驚くほどだという。

7/12 雨でお祭りが延びたので、今日、行列が西宮を出発した、奴の行列がありお祭りらしいが、山車は丸山町の子ども山車だけでさびしい、行列の昼食は横山操さんのところで接待した、八時ころからまた雨になった。

7/19 夏イカ大漁、五百〇六百とったという、値段も初め六杯であったが、あとで十杯になった。（十銭での数か？）

7/20 イカ漁今日も大漁で五百以上あったという。家の周りではイカを掛けていところもある。

7/23 禅源寺で地蔵まつりがあるというので、妻と子どもが行く。

8/3 店の方は閑散の時期だ、白米の暴騰は実にひどい小売相場が一俵十七円二十銭だ(8/9・十九円五十銭)

8/5 役場で度量衡の検査があり、大勢の人が集まっている、家ではばかり六本、ます一個、五尺さし一本だが全部合格した。

8/7 小学生が今晚五時発の発動機船で、札幌へ博覧会見学に出発した、夜、七夕祭で大勢が歩歩き賑やかである。

(開道五十年記念博覧会、第一会場・札幌中島、第二会場・札幌停車場、第三会場・小樽)

8/11 さらに白米が値上がりして一俵二十四五十銭になる、カレ網の注文があったので問い合わせたら、小樽△会社二四〇〇円、東洋漁網三二〇〇円という、こんなに値が違うのも珍しい、綿糸の値上がりも大きい。

8/13 白米の暴騰が著しく、新聞によれば名古屋、神戸、

大阪、富山県下では暴動が起き、人家の破壊や焼き打ちなどが起きているという。

8/17 米暴動が激しく、神戸では十五日に軍隊が出動、政府も外米を安売りし、小樽、函館などでは一升三十銭だという。(一俵十二円)

8/29 アユ漁期なので投網系がぼつぼつ売れる。

9/1 二百十日の厄日だが好天気だ、島泊から刺網を買いに来る、この方面にも、今後の発展のため原価に近い値段で売る。

9/5 七月十日ころ奥尻に行った船が帰って来たが、向こうは大不漁だったという、外の船もぼつぼつ帰って来た。

9/9 困でんぶん工場へ行ってみる、でんぶん工場もこれで五軒になった、先の道博に出品した褒賞者が発表され、古平では身欠鯨で田岸貞治、斎藤兼太郎が銀牌を受ける。

9/10 馬具が売れ出した、鞍が売れ切れたので十個注文する、馬具を売っているのは一軒だけなので、馬車屋連中から喜

ばれる。

9/11 米価暴騰で救助金寄付の勧誘に来る、△一千円、種金一千円、田岸五百円、①七

百円、困三百円などで五千元ほど集まったとのこと。

9/12 イカ漁もなくなつた、沖村道路工事、イモ掘り、その他出面の仕事で人集めをしている。

9/13 でんぶん工場が忙しいらしい、畑作物はテントウムシで、ナス・キウリが特にひどい、町の中でも力がひどく、こんなことは今までにない。

9/16 昨夜、穴でブリが千尾もとれたという、家でも一尾貰う。

9/17 万年筆屋が来た、このごろ万年筆が大流行で、子供でも持っているのがある。

9/18 余市山碓町から磯舟二隻で、四人が刺網を買いに来た、千四百間、他にアバなど二百四十円現金で買って行った、この客が宣伝になるのだから極力勉強した、余市方面へもこれから発展せねばならない。

9/21 役場で米の安売り

が始まる、一升につき十銭安い。

9/22 銀行の連中と山遊びの日なので出掛ける、横山燠製工場を見る、鮭の燠製をみかいている、二年前は小さな小屋一軒だったが、今は四、五棟の建物が建っているそれから予の農園へ行き、支店の農園の池を廻りながら景色を眺めた、でんぶん工場を見て、④公園へ行ったら池を掘っていて、庭木も植えている、来年あたりから立派になるとのこと、廻り渚で休み(㊦)でんぶん工場を見て、帰ったのは四時ころであった。

× × ×

毎号好評で、大変関心を持って読まれている高野名幸作さんの日記を増ページしました。日記は途中の三、四年分が欠けていますが、昭和三十七年まであります。折りをみて特集を組み、「古平の生きた歴史」としてご紹介したいと考えております。むかしに戻って、楽しんでいただければ幸いです。

たらつり師と 古平でのタラ漁

-2-

▼タラの種類

明治中ごろの本を見ますと、タラについてこんなふうに書かれています。

「本道沿岸に産する鰯は三種あり、真鰯、スケトウ鰯、コマイなり。この内食料にするのは真鰯にして、他の二種は多く漁せず。コマイは漁するも大抵粕に製せり。真鰯は最大なるもの三尺五、六寸（二六・一センチ）、最小一尺内外（二五・センチ）、量目五貫（一八・八キログラム）より四百匁（二五・五グラム）に至る。そして四期一定の所に棲息するものと、また、他より来るものとの二種あり、前者を八根鰯Ⅴと言ひ、後者を八通り鰯Ⅴと言ふ。根鰯は鰯根に棲息し、食物を求めるがために群れをなしてその根の区域内を移り棲みながら、春になれば産卵のため深海より浅い

海に来る。西地沿海の鰯は多くこれに属す。」と、あります。

「また、別にハイソ鰯Ⅴと称するものあり、頭部のみ大にして体極めて小なり。この魚は根鰯の如く群れをなさず、近海の浅い所に棲息す。八通り鰯Ⅴは産卵のため、一定の時期になるとある地方より他方に移動するものにして、その往復の通路においてこれを漁獲するなり。」

およそ百年前に書かれたものですが、タラはこのように見られていました。

現在人気のあるスケトウダラは、「此魚は価格低く、漁夫は誰もこれを釣るものなし」と、全く相手にされず、コマイはしめ粕（魚肥）にされたといいますから、時代を感じます。

▼タラの産地

マダラは寒流に棲む魚で、世

界的には大西洋北部が昔からタラ漁業の盛んな地域でしたが、日本近海では北海道周辺から千島、日本海側では島根県の方までが産地です。

先の本が書かれた明治中ごろは「釧路・函館の近海、後志の岩内・余市・高島、それに増毛の近海は最良の漁場で、ことに後志各郡では、タラ場といわれる常に棲息している場所がはつきりと認められ、この地方のタラ漁は全道第一である。」と言われていました。

古平郡 陸から一里〜七里
余市郡 深さ八〇尋〜一八
美国郡 〇尋

▼古平のタラ漁の始まり

タラ漁は、いつごろから始まったかははっきりしませんが、安永九年（一七八〇）、古平の産物の中にタラ油があり、寛政十一年（一八九九）には千タラが作られていたとあります。

天保九年（一八三九）、古平場所を請負っていた岡田半兵衛の帳簿に「鰯、串貝、鰯、カスベ、イリコ、秋味」とあり、重要な産物であったようです。

▼本州からタラ漁の出稼ぎ

明治以前から秋田周辺の漁師は、追鯨といって本道へ鯨魚の出稼ぎに来ていましたが、本州の日本海沿岸では早くからタラ漁が行われていました。その技術や方法も進んでいたもので、秋田・山形（庄内）・新潟（佐渡）の漁師は、タラ漁を目的に日本海を北上して来ました。

彼らはタラ漁が終わると続けて鯨魚にも加わり、本州から乗ってきた川崎船を使って梓船引きをしたり、中には船を提供して共同で刺網をする者もいましたが、鯨魚の終わるころ郷里へ帰って行くのが常でした。

古平へタラ漁の出稼ぎに来たのは庄内・越後からが多く、定住して農業などをやるにも、土地払い下げの恩恵を得られなかった者も多くいたようです。

しかし後に、小林五太郎・本間銀松・松田力三郎・須貝松太郎らが定住するようになり、農業を兼業しながらタラ漁に従事し、タラ釣りの技術なども教えていました。

古平の名勝地

霊場

観音滝ものがたり

(10)

九種類の 観音滝霊場に寄進さ
観音像 れた観音像は、石像
以外のものも含めて三十三体あ
りますが、その姿、形から、九
種類あります。最も多いのが先
に(一二九号)紹介した千手観
音で十二体、次が十一面観音の
七体、如意輪観音の六体、聖観
音の二体で、あとは一体ずつと
なっています。

十一面観 日本では観世さま
世音菩薩 信仰は大変人気が
あるといわれ、十一面観音はさ
まざまな表情で人々に語りか
け、どこでも見えるように頭の
周りに顔がついて、また、手も
像によつては四本とか八本あつ
て、これで多くの人を救おうと
いうのです。

観音像を寄進 観音滝に霊場
した人たちが開かれて、
いろいろな団体や個人が観音像
などを寄進し、台座にそれぞれ

名前を刻して信仰のあかしとし
て残しましたが、年月が経つ
て、今でははつきりと読み取れ
ないものもあります。

ただ、中には名前などが記帳
されているものもあつて、寄進
者の分かっているものについて
挙げてみます。

【第一番】 如意輪観世音

古平ご詠歌講中

禅源寺本堂前に移設

平田サキ 吉能スズ 田口ミヨ
川吉キヨ 野藤トヨ 加藤トメ
森山リン 佐藤梅代 竹浪キヨ
佐藤リね 小平トキ 浅野トメ
保木リサ 輪島フサ 本間ハル
堀 シマ 熊谷サキ 野呂キク
田口ヨシ 室谷キタ 内山トシ
鶴谷ハナ 八幡イツ 長尾ユキ
若松キヨ 大藤ヨシ 大藤キヨ
会田ミネ 柿村キチ 本間ヒサ
高松アサ 小林カヤ 酒井チヨ
吾妻タケ 山下キクノ 熊谷リ

ツ子 真貝サダエ 五十嵐フミ
佐藤ツルヨ 以上三十九名

【第二番】 十一面観世音

泥の木連中・地藏講中
泥の木熊野神社登り口
小さいお堂の中に納められて
いて、名前の読み取りが出来ま
せん。記録も無いので不詳

【第三番】 千手観世音

秋田平左衛門・秋田キク
所在不明

【第四番】 千手観世音

原田イソ
所在不明

【第五番】 千手観世音

高橋大八
観音滝道路わき

【第六番】 如意輪観世音

関川栄吉・関川サワ
禅源寺鐘楼の後ろ

【第七番】 如意輪観世音

浜町ご詠歌連中
禅源寺地藏堂の右側

横田リか 横田勝治 中島千代
浅野とめ 杉山きん 菅原もと
小平トキ 野藤とよ 熊谷リコ
出崎富代 土野はつ 藤井きよ
的場はる 真貝さだえ

【第八番】 十一面観世音

八幡昇二・八幡きく
丸山青峯観音堂前

【第九番】 不空羂索八目観世音

寄進者・所在とも不明
寄進者・所在とも不明

【第十番】 千手観世音

寄進者・所在とも不明
寄進者・所在とも不明

【第十一番】 準提観世音

藤田フジ・藤田フサ
(記帳は大黒屋藤田秀雄
となっています)

十一面観世音



古いノートから ⑧

稲倉石の思い出つづり



富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

稲倉石の正月

—昭和四十二・十二月記—

私は今、稲倉石で六回目の正月を迎えています。

小さな神棚に年に一度の灯りをつけ、そして年に一度だけの手を合わせます。

神様には一切無頓着な我と我が家も、この日だけは人並みに締め飾りをつけ、お餅を供える。何となく引き締まった気持ちにおそわれ、どうしても拝まずにはいられないのです。

ただ何となく鈴を鳴らし、感謝することもお願いすることもなく、無為に合掌している私のそばで、ここ稲倉石で生まれた四才の甚六も、まるで鳩に豆で

もやるように、ポンポンと手を叩き頭を下げています。

ちよつとばかり飾りつけをした食卓を囲み、心を弾ませて片っ端から平らげる。

ストーブが赤々と燃え、汗ばむ程に温かいのに、窓の外は一面の銀世界で、時折吹雪いていくような。

雲の切れめには、星が冷たく煌めいている。

北国の正月は、しんしんと降り注ぐ白雪と、大自然の静肅が包んでくれる。

ご馳走を半分も残し、満腹となった甚六は

「ごちそうさま」と言うや、お腹をさすりながらその場にゴロリと横になった。

何時もなら大目玉をくらわせるのだが、貧しさ故に、子供に苦勞を強いて逝った母が

「子供たちには、何時もひもじい思いをさせているので、せめて正月の三が日は、一切子供を叱らず、言うが尽、成すが尽にし、不甲斐ない親として心の償いをしたもんだ」と語ってくれたことが忘れられ

ず、母が残した私らへの詫と遺言と思い、我が家のしきたりとして伝承している。

そんな事を知ってか知らずか「ねえ、おとうさん。トランプをしよう」と甚六が言う。

適当に負けてやらないとすぐご機嫌斜めになるので、おだてながら上手に負けること数回。



丁度トランプも飽きた頃、NHK紅白歌合戦が始まった。

日頃、ニュースかマンガかで対立する子供達とも、今日はスナリと一致した。

山奥の稲倉石では見にくかったカラーテレビも、住民の総意で、山の高台に共同受信アンテナが設置され、鮮明な画像で見られるようになった。

きらびやかな衣装をまとった人気歌手が、次々と登場する。

ミカンを頬張り、思い思いの格好で見ていた子供も、何時しか眠ってしまった。

一年の中で、一番幸福感にひたるのが、この時のような気がする。

舞うように降りつつける小雪の彼方に、稲倉石神社の灯りがかすかに見える。

昨年、イの一番に参詣し、福引きで一等の精米を射止めた甚六とともに、今年も夢と期待を込めて詣でなければならぬ。

歌合戦も終わりに近い。そろそろ甚六を起こさなければ...

昭和四十三年は、数分後に迫っている。

北海道・樺太・千島を探険

最上徳内

蝦夷草紙

8

を読んでみましょう

農業と稲作の試み

上ノ国では永年、百姓が田畑の耕作をしてきたが、次第に土地も良くなつてきて、今では安定した収穫が得られるようになって来ている。そこで松前の領主は、津軽辺から百姓を呼び寄せて新しく土地を開いて耕作をしたが、初年は実らず、二年目になつて米が二十俵ばかり収穫することができた。三年目はあ

いにくの凶作で実らず、このような状態であつたので領主に田畑の耕作を差し止められてしまった。とは福島村のある老人の話である。

それから領主を始めとして藩士や百姓にいたるまで、松前では米穀は出来ないものと思ひ込んでしまつたのである。

そこで、土地の緯度を測量したところ北緯四十二度で、これは清朝順天府(現在の中国北京)と同じ気候で、ここでは穀類が作られているので、松前でも出来ないはずはない。

羽州(秋田)辺りでも新開地では不作の年もあるというのに、ましてやこの北の果ての寒地では、不作の年があつてもそれはいたし方のないことだろう。

先年は、松前ではアワ・ヒエも良くなかつたのに、近年は江差・箱館周辺では畑が増え、大豆・小豆・アワ・ヒエ・ソバ・ナタネ・大根・菜類が相応に出て来ている。ただ米穀類がまだ作られていないだけである。

私は、以前に東蝦夷地のアツケシ(厚岸)という所に行ったことがある。松前からは東北へ

二百里余りだが、その運上屋の近くに湧き出ている水があり、その辺りに自然に生えているヒエがあつた。種をまく人もいないのにこうして生えているという事は、ヒエ・アワが出来るという証拠である。それなのに松前藩では、蝦夷地へ畑ものの種を渡すことを禁止している。なぜなのか、その理由は分らないが、甚だ嘆かわしいことである。

ひそかに考えてみるに、アイヌの人たちが農業に力を入れ出すと、干魚など漁獵の産物が減つて、請負人との交易品が不足し、それで運上金の少なくなることを恐れたのではなからうか。多くの人を救うためには、一商人の利益にかかわつてはいられないはずである。

アイヌの人たちがヒエ・アワを作り、農業の利益を知ることが国の良民となる道であつて、これがなんの害があるというのだろうか。

【注】水田Ⅱ蝦夷地では和人の常食である米を産出しなかつたが、これを作ろうという努力は

古くからしていた。
『松前誌』などで見ると、次のようなことが分かる。

元禄五年(二六九二)、亀田村では作右衛門という者が稲作を試みたが、二、三年で中止した。

元禄七年(二六九四)、戸切地(現在の上磯町の内)で稲作をし、新米を藩主に献上した。

元禄十一年から十三年まで(二六九八〜一七〇〇)、佐藤信景(有名な国学者である佐藤信淵の祖父)が、東蝦夷地で水田を試みて成功したとあるが確かではない。

元禄十三、四年ごろ、江差の西部で新田を作つたが、永くは続かなかつた。

享保十七年(一七三二)、江差で再び水田が試みられ、米一俵が藩主に献上された。

元文四年(二七三九)、藩主松前邦広の命により、福島村と大野村に新田を開発し、家臣を城中に招いてこれを祝つたが、四年後に邦広が亡くなり、耕作は廃止された。

明和の末(二七七〇頃)、及部村で水田が試みられたが、これ

思い出しても冷や汗

竹 内 コ ト



戦時中ですから、誰も遊んで
いるような人はいりません。港
には鉱石積み大きな汽船が入
港していて、私も畑仕事の合間
を見ては、鉱石のトロコ押し
に出ていました。今も跡が残っ
ている、港町にあった貯鉱場か
ら舩(はし)に積む棧橋まで、船
が入っている日にはこの仕事
があります。

その日もいつものようにトロ
コを押していたら、突然、半
鐘が鳴り出しました。半鐘が鳴
るようなことは滅多にありませ
んから、「何の半鐘だろうね」と、
働いていた人たちで話して
いたら、誰かが「丸山町で火事
だよ」と、言うのです。

丸山町だと聞いて、私はなぜ
かハッと自分の家のことを思い
出しました。子供たちばかりで

留守番をさせていましたから、
急に気になりました。

もしやと思って、一目散にわ
が家に走り出していました。気
ばかりあせって足が思うように
動かず、転げるようにしてわが
家に着いてみると、大勢の人が
集まっていました。消防の人た
ちも来ていましたが、どこも燃
えたような跡も無いのです。人
垣を分けて聞くと、ボヤだった
と言うのです。

家の側に寄ってよく見ると、
住宅のさくり板に卵大ほどの穴
があいていて、そこからスズメ
が出入りしていたので、その中
を見ようと、子供たちがマッチ
をすったところ壁の内側の紙に
火がついて、煙が見えたので消
防に知らせたということでした。

その日は風も無かったので、
大事にいたらないで先ずひと安
心しました。

そのころの住宅は平屋の二軒
一棟で、ちょうど居間の窓の横
に節穴があつて、そこにスズメ
が巣を作っていたのでした。

小さい子供ばかりを置いて行
った私も悪いのですが、働きに
出るのに仕方なかったのです。

子供たちは、大勢の人が集まっ
てきて大騒ぎになり、きよとん
としていました。よその子供も
いたのですが、マッチを持ち出
したのは私のところの子供でし
た。

その時の町内会長さんは山田
与吉さんでしたが、会長さんや
消防の人たちに、お詫びやらお
礼を言つて歩いた覚えがありま
す。

いま思い出しても、背筋がぞ
つとするようなことでした。



(前ページ下段から続く)
も二、三年で廃止された。

安永八年(一七七九)、松前広
永が藩主の許しを受けて、出羽
の農夫成田弥助という者に福島
村に新田を開かせたが、これも
実らず、弥助もまた去つてしま
った。翌九年、津軽の農夫を使
つて耕作し、米二十俵余りを収
穫した。

天明元年(一七八二)、さらに
早稲種の稲を栽培したが、凶作
でついに取り止めてしまった。
徳内が、稲作の例として挙げ
ているのはこれを指している
と思われる。

このように松前地方の稲作は
しばしば試みられたが、ついに
成功しなかった。その理由は、
松前の低温な気候に適する早稲
種が見つからなかったこともあ
るが、塩・米のような必需品は
豊富に、しかも安価に諸国から
運ばれ、比較的不自由を感じな
かった上、稲作よりも有利な鯨
漁の仕事があつたからである。

(以下次号)

断章小説「ふるさと遙か」 第18編

戦死の構図

吉 川 義 雄

ズシリと兵舎をゆらして爆弾の破裂した音が伝わり、反射的に友野の身体は床に伏せ、そして外にとび出した。

西空には、まだ雲を赤らめて残光があり、暮れなじむ薄暗が迫っていた。

こんな時間に空襲を受けることなど、今まで無かったことであり、ましてや小型機で奇襲されたのも初めてであった。

双胴の長距離戦闘爆撃機P38が低空で忍び寄っていたのだ。その機影を追いかけて、周辺の銃座から曳光弾が次々と空の暗がりの中に火箭を打ち上げていた。

戦闘はすぐに止んだ。しかし、いつものことだが悲惨と苦吟は必ずそこに残酷の姿でこのす。

友野の部下、宮部平八が戦死

したのは、このときであった。

班の夕食のあと片付けをするため、ほう炊所に行き、帰りに空襲に遭遇した。彼は防空壕にとび込んだが、運悪く、その不完全な壕が爆弾の直撃に合い、中に逃げ込んだ他の三人と共に、あっさり死んでしまった。

戦争が次第に苛酷になり、青年たちが不足した補充に、三十代は当然として、四十歳代の男も国民兵として召集され始めていた。海軍にも、それら国民兵の姿がチラホラ見かけられた。友野の班に配属されて来た、その最初が宮部であった。

どこでどんな訓練を受けてきたのか、やること為すことがトロくさく、軍隊が嫌う、いわゆる娑婆っ気がとれていないから、どこの班でも持て余し気味で、彼らの頬の鳴らない日は無

かった。彼らにやらせられることは洗濯、食事係、便所掃除、古い兵がやりたがらないことは全部引き受けさせられていた。

先任兵のうつぶんを彼らは全部引き受けて、奴隷のように追い廻わされていた。古い兵の中には、志願で来た者もいるから十代の者もあるし、大半は二十歳を少し越した者ばかり、戦闘帽をキリッと目深にかぶった若者が、対照的に、頭にアマタにのっけている老人を追いつて姿は、哀れであり、帝国海軍の末路の姿でもあった。

友野は、班の者に宮部だけでなく、国民兵の制裁を嚴重に禁止した。文句があるなら俺をなぐれとも言って決意を示した。

薄暗い灯火管制の灯りの下で宮部は、よく縫ものをしていった。班の上官の靴下の穴埋めがその大半だが、洗濯のときに見つけた穴は、彼の手で確実に繕うられた。近眼のめがねを鼻の上になすり上げながら、ときには針を髪にこすり付けながら懸命にやっていた。

友野が、彼の横に腰掛けて、

話しかけたことがあった。

「宮さん有難う、助かるよ。」

宮部がとびあがって敬礼しようとするのを制して、友野は笑いながら言った。

「家族はいるの」

「ハイッ、東京の浅草で風呂屋をやっております」

いろいろ尋ねている内に、言葉の中に関西弁が混じるのをいうと、

「そうですね、いろいろありましたが、大阪から出て来て今の家に聳に入りましたのですワ。」

そして、オホホと、くったくの無い笑い声をたて、

「コラッ、その笑い声はやめれ。俺だからいいが、他の者の前でやると、また小突かれるぞ」と注意されていた。

戦後、友野が身欠きにしんを背負って、浅草で焼け残っていた彼の風呂屋を尋ねた。宮部が空襲下、立派に戦って戦死されたと、友野は熱弁で女房に告げた。空しかった。

(この稿終わり)

短歌

古平町岬短歌会

十二月詠草

道端の雲龍やなぎ川に垂れ水に尾を打つ鬼やんまひとつ

竹内 コト

文化展にわれらの出品を先に見て今年も終りとゆつくり巡る

池田 テル

新道のななかまどの実はたわわなり初雪冠りて絵のごとく見ゆ

櫛 佳 代

注文の折りたたみ杖届けむと吹雪く夕べにきみ来てくれぬ

奥山 きよみ

晩秋の夕暮れ時の工事現場の騒音に混じりて張り上ぐる声

鈴木 時子

塩うすく漬けし今年のニシン漬け暖冬のせいか味の落ちをり

田中 香苗

来春も元氣に戻ると言ふ友を日暮れのホームに見送りて佇つ

丹後 初江

まなかひに雄冬増毛の近くして大きく赤き月のぼりたり

山口 スエ

味噌汁に茄子の形の生麩なまふうく湯毛を透かして彩いろあざやかなり

堀 典子

俳句

古平ホトトギス会

独り居のしきたり省き年用意 斉藤波留

茶箱よりいでし角巻母の顔 山口悦子

ナナカマドこぼれ落ちそう実の垂れて 越野敏雄

白菜の嵩を鎮めて朝鮮漬 大和田絵伊

ちんちんと鉄瓶のなる寒さかな 関口勝志

バスの旅トンネルを抜け冬木立 よしざきり

直送のミカンの文字の真新し 仲谷比呂古

神威岬千畳敷の冬怒濤 越野清治

ジャンボくじ夢は小さく神頼み 室谷弘子

地震かとも除雪車来る真夜三時 福井幸平

日曜の巡りの早き師走かな //

川柳

石井愛子

扇さん日本のサッチャー腕だめし
大正ッ子産声あげてはや八十路
政治家も大将なんだと止めている



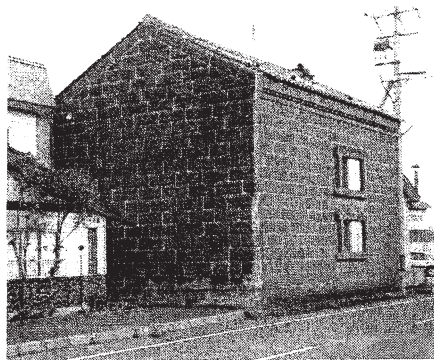
古平いろは歌

い 石倉が鯨の繁栄語り継ぎ 〈石倉〉
 ろ 六三制戦後生まれで難産し 〈六三制〉
 は 泊月の句碑を照らして盆の月 〈野村泊月句碑〉
 に 鯨群来ソーラン節の大合唱 〈鯨大漁〉
 ほ ホツケ澗にヤマセを避けて弁財船 〈沢江ホツケ澗〉
 へ 平成に今よみがえる宝海寺 〈宝海寺〉
 と 灯台を目指せば家族の待つ港 〈築港完成〉
 ち 鎮魂歌朝日を受けて丘に建つ 〈鎮魂歌詩碑〉
 り 旅行村自然の中ではずむ声 〈古平旅行村〉
 ぬ 抜け出したそば喰い地藏の願応寺 〈願応寺〉
 る 留守番は猫にまかせた鯨どき 〈鯨群来〉
 わ 鰐口を打ってお詣り恵比須さん 〈鰐口〉
 か 開拓の苦闘を語るロクシナイ 〈ロクシナイ〉
 よ 夜が更けて信者で賑やか庚申さん 〈庚申碑〉
 た 立ち昇る古平温泉湯の香り 〈ふるびら温泉〉
 れ 霊場の岩場に残る観音像 〈観音滝霊場〉
 そ その昔リンゴで栄えていま団地 〈栄団地〉
 つ ツルノツペ草に埋もれたイチゴ畑 〈ツルノツペ〉
 ね 願いごとと鬼子母神の正隆寺 〈正隆寺〉
 な 仲間みな集いて語る秋天下 〈高野素十句碑〉
 ら ラッパ鳴りススキナイでの射撃会 〈ススキナイ〉
 む 昔から海の安全観音さん 〈丸山青峯観音〉

う うずを巻きイワナが跳ねる廻り淵 〈廻り淵〉
 え 蝦夷錦誉れも高い素友歌碑 〈今中素友歌碑〉
 の のろし台シリバの岬と相對し 〈丸山のろし台〉
 お 大晦日平和の鐘が鳴り響き 〈平和の鐘〉
 く クマあそぶクマの神社の名の由来 〈熊野神社〉
 や 山紅葉古平平野は黄金色 〈古平の稲作〉
 ま マンガンで稲倉石は日本一 〈稲倉石鉱山〉
 け 競馬場中学生がランニング 〈競馬場〉
 ふ フジ、サクラ緋鯉も群れる偕楽園 〈偕楽園〉
 こ 来ぬ人を待ち続けるセタカムイ 〈セタカムイ〉
 て 出羽丸の美談伝えるシコロの木 〈出羽丸遭難〉
 あ 赤い崖フレーピラが名の起こり 〈フレーピラ〉
 さ 三郡の境にそびえる両古美山 〈両古美山〉
 き 金次郎見ながら通った小学校 〈二宮金次郎銅像〉
 む 幽霊の写真で人気の当丸峠 〈当丸峠〉
 め 名水は泥の木川の滝となる 〈古平上水道〉
 み 港町丘はリンゴの花盛り 〈リンゴ〉
 し 七軒町茂みの中に名が残り 〈七軒町〉
 ひ 火渡りの伝統守る猿田彦 〈火渡り神事〉
 も もう一度逢ってみたいな羅漢さん 〈五百羅漢〉
 せ 節分の豆で占う鯨漁 〈豆占い〉
 す すけそ漁吹雪の浜に大漁旗 〈すけそ漁〉
 ん ンだんんだ皆で知恵出せいろは歌 〈古平方言〉

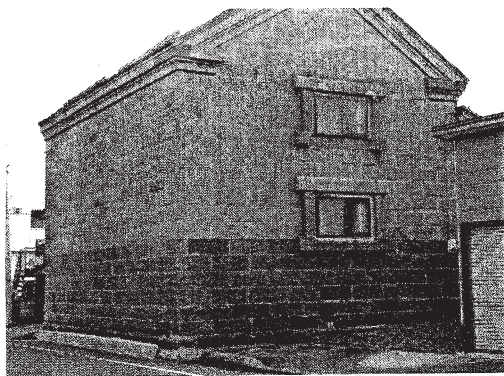
い
石倉が鯨の繁栄語り継ぎ

古平の石倉は家財や商品の収納・保管という外に、漁業者にとつて大事な漁具や生産物を保管するために、海岸の道路沿いに建造されたものが多い。そのほとんどは鰯が豊漁であった明治の末ごろから大正年代のもので、番屋建築といれる独特の住宅が建てられたのもこの時期である。材料の石材は、北前船の寄港地であった越前（福井県東



△入船町・㊦山口家の石倉▽

部）辺りから運んで来たもので、その外には湯内（現在の豊浜町）や札幌の石切山の軟石なども使われたがこれらは少ない。本陣の沢の奥からも軟石が



△入船町・中 竹本家の石倉▽

採掘されたが、これは漁粕を炊く釜場などに使われた程度である。

石倉は堅牢で火災にも強いこ

あ
と
が
き

▽新聞を見ていて、一人で笑い出すことがあります。

先日新聞で、「……わが家のお姉ちゃんは一、二、三の容器を飲むとき、ミルクの出た後の容器を一、二、三回振りますが、お兄ちゃんは指でぐしゃつとつぶしてしまします。お母さんは全部出るまで真剣に見ていて、くつついているミルクをスプーンでとりまます。おばあちゃんは、ミルクが出たあとに容器をスプーンでコーヒーを入れ、それをまたカップに戻します。お父さんは、さっと入れるとすぐ容器をポイと捨てます。」

ところで、あなたはどっち？
▽こんな三世代が同居している
のですから、なかなか共通の話
題というのは見つからないでし

とから、町内には三十数棟の石倉があったといわれているが、昭和二十五年の西部方面の大火では七、八棟が被災し、また取り壊されたものもあって、現在残っているのは十棟余りのよう

よう。こんなとき、古平のむかし話などどうでしょう。

▽去年の年末は、コンピュータの2000年問題でもちきりでしたが、今年は携帯電話の普及で、年末から新年にかけて利用が急増することが予想され、交換機のコンピュータのパンクが心配だ、とのこと。今年もやはりコンピュータですか。

元旦に見る朝日はまた格別のよう
うで、人より少しでも早く見た
いとジェット機で、上空からご
来光を拝むツアーがあるそうで
す。だまっていとも昇つて来る
太陽なのに——とは考えるもの
の、ある写真家が撮影した、富
士山頂からの雲海に浮かぶ朝日
を見ては、やはり感動します。
▽二十一世紀の新年を、共にお
よろこびいたします。

である。

【参考】
いろはかるた

京都 一寸先は闇
大阪 一を聞いて十を知る
江戸 犬も歩けば棒に当たる

(以下次号)